ポスター発表Ｐ⑦

医療系学生は医療コミュニケーションをどこで学んでいるか

長宗雅美、岩田　貴、福富美紀、赤池雅史
（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部　医療教育開発センター）

１．はじめに

医療人の基本的臨床能力として、医療コミュニケーション能力が求められ、徳島大学においても各学年で様々なコミュニケーション教育が実施されている。しかしながら、その検証は十分ではない。今回、医学科６年生を対象に、学生が基礎的汎用的能力のひとつであるコミュニケーション能力について、どこでその技能を学び、どのような意識をもっているかを検討した。

２．対象および方法

対象：医学部医学科６年生 105 名

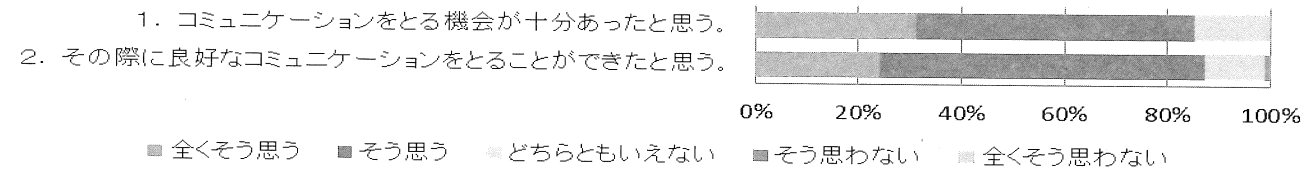
方法：アンケート調査

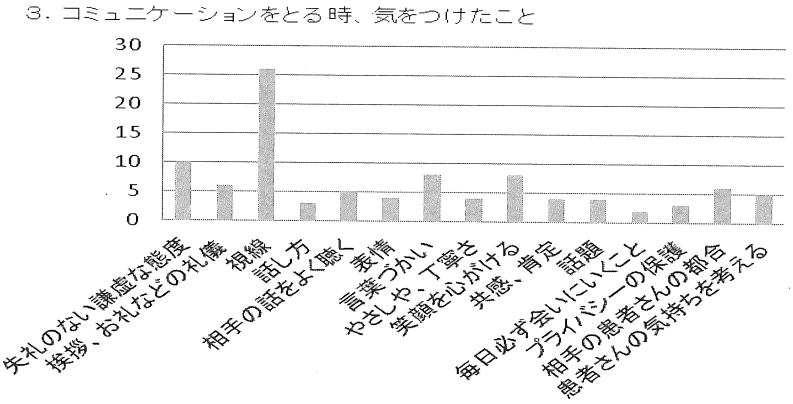
Advanced OSCE（Objective Structyred Clinical Examination 客観的臨床能力試験）終了後に実施。

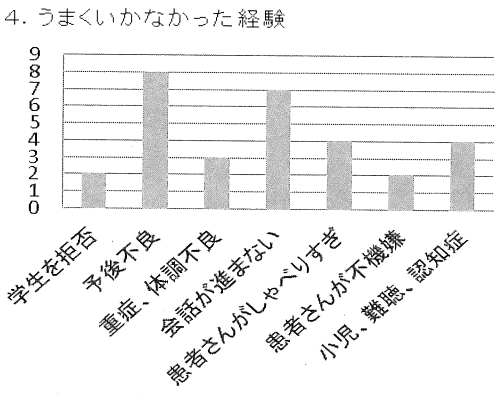
アンケート回収率 91%（96 名）

３．結果

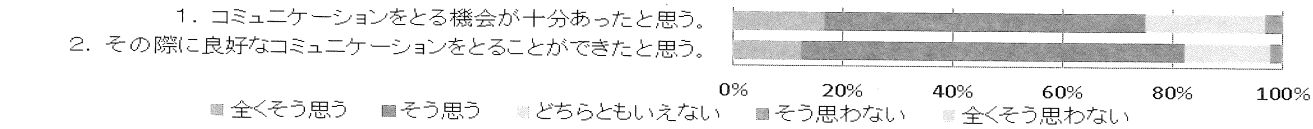
①臨床実習における患者とのコミュニケーション

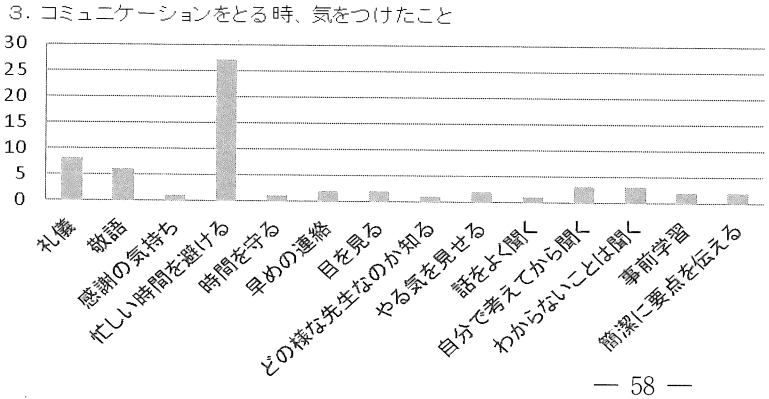


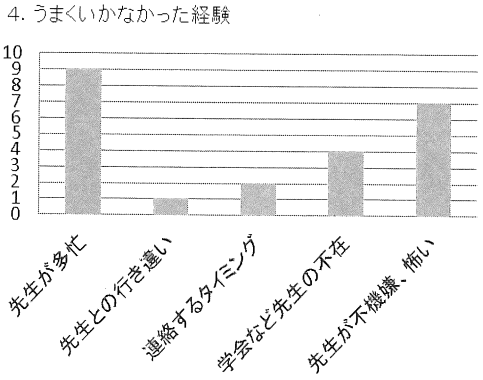




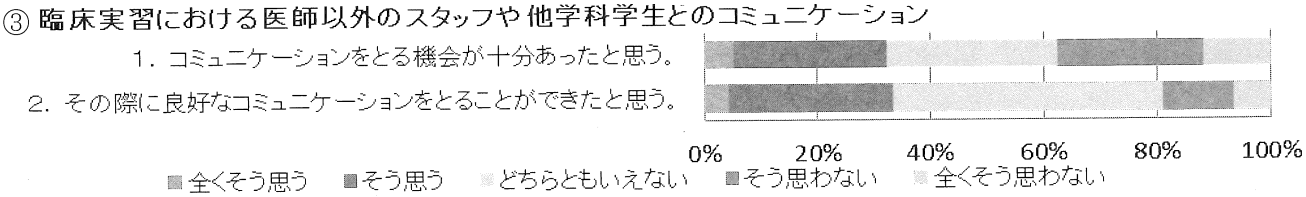
②臨床実習における指導医とのコミュニケーション

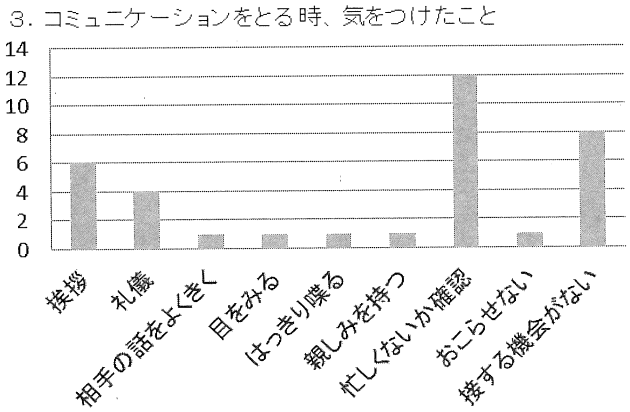




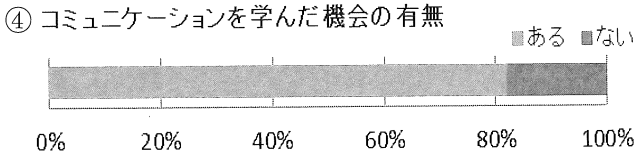


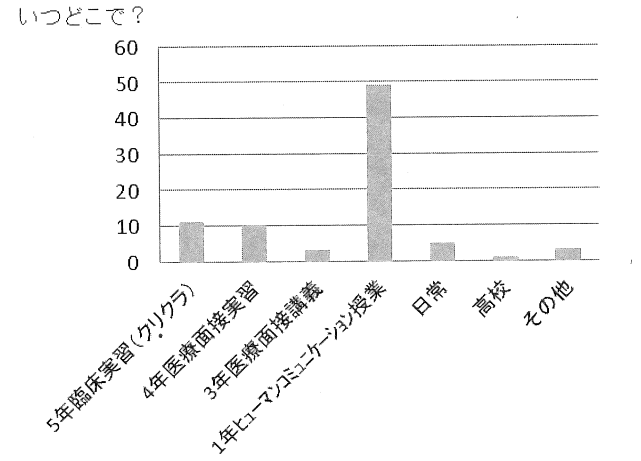
③ 臨床実習における医師以外のスタッフや他学科学生とのコミュニケーション

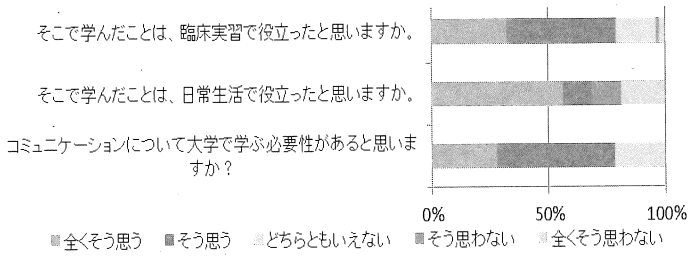




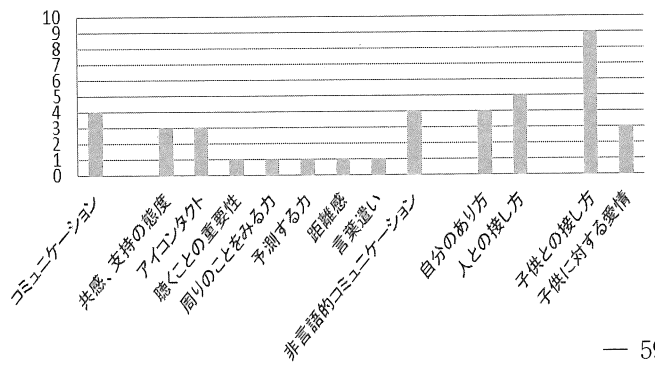
④ コミュニケーションを学んだ機会の有無







1年時ヒューマンコミュニケーション授業で学んだと認識しているもの



4．考察

多くの学生は臨床実習において、患者とコミュニケーションをとれていると感じており、相手の状況を予測しながら、向かい合おうとしている様子がうかがえる。しかし、予後不良の患者や会話が進まない患者とのコミュニケーションは不十分と感じている学生が多く、これは臨床実習前における医療面接の実習や OSCE が初診面接に限定されていることも影響していると考えられる。

指導医とのコミュニケーションは 8 割程度が十分とれていたと感じているが、多忙な指導医にどのようにアプローチするか悩む様子がうかがわれ、そのルールや方法について臨床実習前に具体的な説明が必要と考えられる。

このように臨床実習において医師や患者とのコミュニケーションをとる機会が多い一方で、他学科の学生や他職種の医療スタッフとのコミュニケーションの機会が少ない。これについては、共通の受け持ち患者についてディスカッションする場を設ける等、臨床実習に専門職連携教育を積極的に導入する工夫が必要であると思われる。

また、学生がコミュニケーションを学んだ機会として認識してるのは 1 年時の共通教育における授業が約半数を占め、1 年時の学びは学生の意識の中に定着しており、その重要性が示唆される。しかし、その学習内容は、「子供との接し方」が最も多く、その後の専門教育で必要とされる汎用性の高いコミュニケーション能力へと発展させていく取組が不可欠であると考えられる。

5．まとめ

医学科学生のコミュニケーション教育においては、遭遇すると予測される困難なコミュニケーション場面を学ぶ機会やチーム医療を学ぶ機会が必要であり、アウトカムを見据えた共通教育と専門教育との連続性・連携性が重要である。